

E. サピア『言語』(1921)の言語史原理(後篇)
 ——第7章, 第8章「歴史的所産としての言語」解説——

三輪 伸春

On Sapir's Principles of Historical Linguistics (II)

Nobuharu MIWA

Abstract

Edward Sapir's *Language: An Introduction to the Study of Speech* (1921) is, though one of the masterpieces of linguistics, generally considered a handy and easy introduction to linguistics among linguists all over the world. The reason may be found in the fact that the book is apparently written in an easy style and every day English, quite unlike other books and papers on linguistics, and complex technical terms are hardly found on any page of the book. Such terms as *pattern* and *drift* are often used in everyday life. Other words such as *Ablaut* and *Umlaut* are those which any student who begins to study comparative and historical linguistics cannot fail to meet in their first lessons. However that is the very reason we are apt to miss Sapir's thoroughly-thought-out view on the method of historical linguistics. The aim of this paper is to clarify Sapir's view expounded in *Language* concretely and intelligibly for the first time.

キーワード：1. サピア, 2. 駆流, 3. 印欧比較言語学

Key Words：1. Sapir, 2. drift, 3. Indo-European Comparative linguistics

日本語要旨

サピアの *Language* (1921『言語』) は名著といわれ好意的に評価する人が多い。その理由は、他の言語学の専門書のほとんどが大部であり、難解な理論や無味乾燥なデータが多く、自然科学風の文体を心がけているのに反し、サピアの『言語』は比較的小さい書物であり、一見日常的なやさしい英語で書かれ、文体もやさしく専門用語がほとんどないことがあげられる。多少特殊な用語といえば「*pattern* (型, パタン)」、「*drift* (駆流)」であるが日常的な語である。他に「*Ablaut* (アブラウト)」、「*Umlaut* (ウムラウト)」、「類推 (analogy)」があるが少しでも印欧比較言語学を学んだ人には周知の用語・概念である。しかし、サピアの『言語』は10万年にわたる人類言語を共時的、通時的に俯瞰できることが意図されており、見かけとは裏腹に難解である。サピアが「パタン (*pattern*)」という語で意図したのは「(音声・形態の) 体系・構造」であり、フンボルトの「内部言語形式」、ソシュールの「ラング」、チョムスキーの「言語能力」にも通ずる射程を持っているので注意を要する。やさしく見える英語は、わずか2カ月で書かれたといわれていることから推察できるように、まるで詩神にとりつかれて一気呵成に書き上げられた詩のようである。従って、文章を論理的にするべく推敲した形跡がない。特に、言語史を論じた第7章, 第8章, 第9章は緊密度が高いので一字一句も加えることも差し引くことも難しい。また、サピアの時代は印欧比較言語学

が頂点を極めた時代が続いており、言語学といえば歴史言語学以外にはありえなかった。しかも、19世紀の歴史言語学に大きな影響を与えた『言語史原理』の著者である H. パウルは、サピアが『言語』を執筆中はまだ存命であった（1921没）ので正面きっての批判を避けたのかもしれない。

§ 1 「駆流 (drift)」

人間にかかわる社会現象の中で最も自足的で最も変化しにくいのは言語である。しかし、その言語といえども言語を担っているのがその言語共同体を構成する個々人である限り、同一の言語を用いても発話、文法、語彙のすべての面において、程度の差こそあれ個人差、そして地域・階級・職業による差異が生じる。同じ時代にあっても個人や方言間の差異（共時的差異）があるのだから、言語が長い歴史を経過すれば、その差異は当然大きくなり、いろいろな変化が生じる。共時的に存在する個々人の差違も、歴史を経て現れる諸種の変化も表面的には海面上に現れるさざ波のごとくバラバラであるが、ひとつの言語全体の歴史的变化には、海面下を一定方向に流れる大きな海流に比すべき基本的な傾向を認めることができる。言語を一定の方向に「駆り立てる (to drive)」という意味でこの基本的傾向を「駆流 (drift=drive のアプラウトによる名詞形)」という。

(1) 英語における駆流 (駆流 A)

英語史に見出される一定方向への変化も、一再ならず取り上げられ論じられてきたテーマである。

L. P. Smith (*The English Language*, 1912, rpt. 1966, pp.9-11) は英語史全体を見た場合、ye と you の区別、現在分詞接辞 -end(e) と動名詞接辞 -ing(e) の区別をそれぞれなくしたこと、あるいは古い関係代名詞 that の例外的温存、名詞の古い -en 複数形 (oxen, children, etc.) の例外的温存などのようにすべての現象がかならずしも好ましい方向に変化しているとはいえないが、全体として見ると、進行形の確立、いろいろな助動詞 (auxiliary verb) の発達、助動詞 do の諸機能の拡充、its の創出、名詞の形容詞用法 (garden flowers), 名詞属格語尾 -'s を単なる格変化語尾から解放し単独語に相当する機能を与えて群属格 (group genitive: e.g., the King of England's son) をも可能にしたことなど、数々の変化は英語の特筆すべき進歩であり、これらの有用な諸用法の発達は、アングロ・サクソン民族全体の思惟と意図の下に何らかの計画性が存在しているようだと述べ、このように言語を一定の方向に導く推進力を 'the genius of the Language' と称している。

また、Jespersen (*Growth and Structure of the English Language*, 1905, 1938⁹) は第一章で、必要に応じて歴史的経緯を考慮に入れながら、英語の特徴を、語順の固定化、名詞複数形の -(e)s 系への統一などを論じて英語は論理的、男性的、実用的で沈着冷静な性質の言語であると述べ、これはアングロ・サクソン人の民族性と表裏一体であると結論している。

一方、Sapir は英語の一般的傾向を、Smith, Jespersen とはかなり違った観点の下に論じている。Sapir は、まず第7章で、文法的には正しい 'Whom did you see?' ではなく 'Who did you see?' が好まれるのはなぜかという設問から考察を進める。そして、透徹した言語観に基づく緻密な

分析を経て以下の3点 i)~iii) をひとつの言語としての英語の駆流として提示している。

第7章では、深謀遠慮の上選択された、英語の Whom did you see? と Who did you see? というふたつの文を取り上げて詳細に比較検討して以下の3項目を英語の駆流としている。これを仮に駆流 A とする。

(1) 駆流 A (英語の駆流)

- i. 主格と目的格との区別を水平化しようとする周知の傾向 (p.281)
- ii. 語の統語関係に決定されて、文中の位置が固定する傾向 (p.287)
- iii. 不変化詞に向かおうとする傾向 (p.291)

i) 格変化をなくそうとする駆流

古期英語期の名詞には4つの格(Case:主格, 対格, 与格, 属格)があった。しかし、現代英語では、人称代名詞は格変化を保持している(I-my-me, he-his-him, etc.)が、名詞では属格(John's hat, etc.)のみがかりうじてその形態変化上の区別を残しているにすぎず、主格, 対格, 与格は形態上の区別を失い同一形になってしまっている。疑問詞と関係詞の場合も、本来 whom と一群をなすべき which, what, that は主格形と目的格形(対格, 与格)との区別をしない。従って、目的格 whom はこの wh- グループの中では特異な存在であり、好まれない。

ii) 語順の固定化

格変化の消失とあいまって、「S + V」という語順を肯定平叙文に限らずすべての種類の文に固定化しようとする強い駆流があり、現代英語では文中の最初の名詞句は主語(主格形)であることが期待される。動詞の前で屈折した目的格が現れるのはわずかに 'Whom did you see?' の型の文だけであり、従って、whom より who が好まれる。

iii) 語の形態上の不変性に向かう駆流

現代英語では、例えば、the big stone という表現を構成する冠詞, 形容詞, 名詞のうち、格, 数, 性の変化があるのは、わずかに名詞 stone が複数形と属格形になりうるだけで、冠詞, 形容詞, 名詞のいずれもが古期英語以来活用変化をしない形態上の不変性が指向されている。疑問代名詞としての who, whom は which, what と相関関係にあるばかりでなく、疑問副詞 where, when, how と密接に呼応しあっているが、これらの語はいずれも不変化詞であり、かつ一般に強勢が置かれる。Whom did you see? の場合、文頭におかれた Whom は例外的に屈折した目的格形であるうえに、強勢のおかれた Whom は重苦しく感じられ、リズムの面でも -m は余分であると感じられている。

§2 駆流 B: 英語とドイツ語に共通する駆流: 大母音推移 (Great Vowel Shift)

サビアはつぎのようにいう。言語にはそれぞれの歴史的特徴、すなわち駆流 A がある。しかし、海面の波が風向き, 風力, 朝風, 夕風などの外的条件により方向, 高さ, 強さがひとつと

きも休むことなく変化するのに反し、黒潮、親潮といった海流は目に見えない深いところを1年365日ほとんど同じ速さで同じ方向に流れている。それと同じように、言語の駆流にも表層的な駆流と深みを流れる駆流がある。ひとつの言語の歴史に認められる駆流 A は表面的でわかりやすいが、駆流には深みがある。言語が共通祖語から受け継いだ駆流は一層深いところを流れ、分離独立以後も分岐した諸言語に同一の、あるいはよく似た現象として現れる。それが駆流 B であるとして、次のようにいう。

(2) 駆流 B (共通祖語から受け継いだ駆流)

しかしこれ【=駆流 A だけ】がすべてではない。方言分裂以前の、もっと根本的なそして駆流の運動量 (モーメント) は、往々にして大層なものなので、【祖語から】分裂して久しい諸言語が、同一の (またはきわめてよく似た) 過程を経過することすらある。【しかも】そういう多くの場合、方言の【=分裂した言語間の】相互影響があり得なかったことは、明らかである。(p.297)

そのうえで、サピアは英語とドイツ語に共通する母音の大推移を取り上げている。それが、祖語を同じくする言語間に共通の駆流、すなわち駆流 B である。サピアは、言語接触の影響とは考えられない連鎖的な母音の大推移すなわち大母音推移が祖語を同じくする英語とドイツ語に共通に見られるとして分かりやすく叙述しながら、以下に取り上げた用語・概念に潜む重要な問題を巧みに織り込んで独創的な言語史観を展開している。

英語というひとつの言語の駆流 A から系統関係にある言語間の駆流 B へ、そして究極的には当然予想されるごとく人類言語に普遍的な駆流 C へと論を展開している。視点を、駆流、音声のパタン¹、形態のパタン、ウムラウト、アプラウト、類推といったテーマに限って読めばそれなりの理解は得られるが、サピアはそれらの現象を言語の歴史全体を考慮に入れながらそれぞれの用語・概念をたがいに関連させ、重ね合わせて織り込んで論じているので全体として完全に理解するには大局的な見方とともに用語の読みに細心の注意が必要である。本稿では、サピアの意図を理解するために繰り返しと重複をいとわずサピアからの引用に基づき、解釈を試みる。特に、なじみのある用語に注意が必要である。例えば、formal は「形式の」ではなく「形態のパタンに関する」を意味し、pattern は「一般的な型、類型」ではなく、「言語の内的構造としての (音声、あるいは形態の) パタン【体系】」を意味している。また、英語の動詞 speak の名詞形 speech は「話しことば」を意味することを心得ておかないとサピアの意図をくみ取ることができない。英語は、speech, written language, word, language を「話し言葉」、「書き言葉」、「単語、語」、「言語、ことば」と厳密に区別するが日本語ではそれらすべてを「ことば (言葉)」一語で表せるので混同しないように注意が必要である。

サピアは *Language* の冒頭の一文で記している。

1 サピアの「パタン (pattern)」はソシュールの「ラング」、フンボルトの「内部言語形式」、チョムスキーの「言語能力」と考え、「言語の体系」と置き換えるとわかりやすい。

- (3) この小著は、言語に関する事実を寄せ集めるよりも、むしろ、言語という主題について、信頼に足る全体像を与えることを目指している。(…)

言語研究の専門家も、不毛な、専門的な見方しかできない態度から救われたいならば、自らの学問が自分の想定している以上に他分野とのかかわりを広く持っていることを知ることが絶対に必要である。(p.9)

神宿る細部を見落とさないと同時に言語という広大、かつ深遠な世界の全体像を見通すことのできたサピアにしていえることである。サピア自身が、言語学は無論のこと、文化人類学、宗教学、心理に精通し、芸術、文学、音楽にも活動の場を広げていたことはよく知られている。そのサピアの言語学の全体像を解説することはかなり困難である。

まず、祖語を同じくする言語である英語とドイツ語の母音の大推移、いわゆる大母音推移のあらましを、296頁から312頁にわたり述べている。その母音の大推移の影響のもとで英語の単数形の *foot, mouse* とドイツ語の単数形 *Fuss* [fu:s], *Maus* [maʊs] の語幹母音の音声変化、形態変化、そしてそれぞれの母音変異による複数形、すなわちウムラウト複数形である英語の *feet, mice*、ドイツ語の *Füsse* [fʏ:zə], *Mäuse* [mɔʏzə] の語末の母音 *-i-* の消失、それにウムラウトの影響を受けた語幹母音の高母音化と、語形変化の経過を説明した後、サピアは次のように記している。

- (4) この無味乾燥な表の背後に隠されている心理的な問題を、洗いざらい探し出して論議することは、到底できそうにない。両者の全般的な平行性は明白だ。実は、英語とドイツ語の語形は、西ゲルマン語の原型からそれぞれ別個に派生しているのに、今日では、どちらかの組が原型に類似しているよりも、相互に類似している度合の方が大である、といってもよいくらいだ。(p.312)

それぞれの表が例証していることは、強勢のない音節を縮約する傾向、後続する母音 *-i-* の影響による語幹要素の母音変容、中高の長母音の舌の位置の高まり、(英語とドイツ語の *ō*[o:] は *[u:]* へ、*ē*[e:] は *[i:]* へ、【ただし、ドイツ語の *ō* と *ē* は二重母音化を經由】、古い高母音の二重母音化(英語とドイツ語の *ī*[i:] は *[ai]* に、*ū* は *[au]* に)である。祖語を同じくする言語間のこういう平行的変化は、偶然ではありえない。祖語からの分裂以前の、共通の駆流に根ざしているのである。(p.312) (引用者、発音記号と長音記号などを加筆)

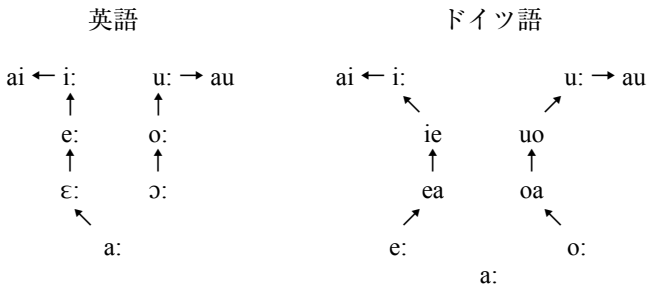
引用(4)の後半はゲルマン諸語に特徴的な歴史的傾向(駆流B)である。わかりやすく簡条書きにする。

- (5) 1. 強勢のない音節を縮約する傾向、すなわちゲルマン語の強弱アクセント傾向にともなって強勢のない後続 *[i]* の脱落。これにより *fōti* [fō:ti] は *fēt* [fē:t] になった。
2. 後続母音の影響による語幹要素の母音変容【=ウムラウト (*fōti* → *fēt*)】、

3. 中高の長母音の舌の位置の高まり, (英語とドイツ語の \bar{o} は [u:] へ, \bar{e} は [i:] へ),
4. 古い高母音の二重母音化 (英語とドイツ語の \bar{i} は [ai] へ, \bar{u} は [au] へ) である【= 3, 4 は大母音推移の一部】(長音記号と発音表記は引用者加筆) (p.312)

引用 (5) の 3, 4 の長母音の連鎖的大推移を図にしてみると以下のようになる。

(6) 英語とドイツ語に共通する「大母音推移」の概念図



(7) 上図の要約

1. 英語とドイツ語の大母音推移はすべての長母音の連鎖的推移である (ドイツ語の \bar{a} は除く)。
2. 英語とドイツ語は時期をほとんど同じくしてきわめてよく似た母音の大推移を経験した。ただし, 英語の方が約300年先行して推移を起こした。
3. 英語, ドイツ語ともに前舌母音, 後舌母音はすぐ上の位置に推移し, 長母音としてはこれ以上上昇できない [i:], [u:] は二重母音化した。
4. このような酷似した, 母音の大推移は両言語がゲルマン祖語の時代から受け継いだ駆流の作用に起因する。なぜなら, ゴート語にはこの種の大規模な母音推移の兆候はないのに, 両言語が直接の接触を断ってから別個に生じた現象であるからである。

これに筆者の見解を加える。

(8)

5. ドイツ語の場合, 中高の母音が前舌, 後舌ともに一端, 二重母音化 ($e:>ea>ie>i:$, $o:>oa>uo>u:$) しているのに反し, 英語では直接高い位置へ (狭口方向に) 推移しているのは, 英語の長母音体系が過重負担の状況にあり早急な解決を迫られたのに反し, ドイツ語の場合, 長母音の数が少なく, 安定していて推移に抵抗したためにいったん上方向に二重母音化するという迂路を経由した。その後, 祖語から受け継いだ駆流に従って推移した。駆流はそれほど根強い影響力を持つ。

6. ヨーロッパの多くの言語が母音の大推移を経験したが言語によって推移の方向が一定していない。全体として一定の方向に推移したのはゲルマン語派に属する英語とドイツ語だけである。従って、ゲルマン語の駆流である。(三輪『英語史への試み』第1部、第2部参照)

この6項目にわたる要約の意味は次のように解釈できる。

従来、英語音韻史の研究では、いわゆる「大母音推移 (Great Vowel Shift)」は英語に限られた現象として論じられる場合が多い (O. Jespersen, E. J. Dobson, H. Kökeritz, A. A. Prins など)。しかし、英語の大母音推移に類する大規模な母音の連鎖的推移は、ギリシャ語、古代フランス語、スペイン語、スウェーデン語などヨーロッパの諸言語にも見られる現象である²。ところが、それらの言語の大規模な連鎖的推移の方向は一定しなかったのに反し、ゲルマン語派に属する英語とドイツ語だけはすべての長母音の推移の方向が酷似している。ゲルマン語では、すべての長母音は上方向に推移し、[i:, u:] は母音としてそれ以上、上方向に推移できないので長母音から二重母音になった。このような長母音の大推移は英語とドイツ語との接触が途絶えて久しい時期に起きた音変化であるから言語接触による影響とは考えられない。ゴート語 (4世紀のウルフィラ Ulphilas の新約聖書) にはその気配さえ見られないことから英語とドイツ語がゲルマン祖語以前の時代から受けついできた「駆流 (drift)」が、ゲルマン祖語の分離独立後、接触がなくなって長い時を経てから現れたゲルマン語の駆流 (駆流 B) である。なお英語とドイツ語以外のゲルマン語では、スウェーデン語、オランダ語に長母音の類似した変化傾向がみられるが体系的な研究は乏しい。

英語とドイツ語に共通に生じた長母音の連鎖的推移はそれだけでも大変に大きな問題であるが、サビアは、音韻だけではなく、形態の変化にも重要な見解を述べている。

まず、サビアの325頁から326頁を要約する。

- (9) もし、(...) 音変化が、すべて変化したまま残ると、大半の言語はおそらくその形態のパタンとの接触がなくなるまでに形態上の組織に不規則さを露呈するだろうと思われる。音変化は、機械的に作用する。従って、音変化は、ある場合には、形態の組織の全体に影響を及ぼすことがある。(...) また、時には、ある形態の体系の一部のみに影響を及ぼすことがある。この場合は混乱が生じることがある。例えば、次に示す古いアングロ・サクソン語の語形変化表は、機械的な音変化の破壊的影響を受けたために、形態としては不便を生じたために長期にわたって修正されないままをいうわけにはいかなかった。(pp.325-6)

	単数	複数
主格・対格	fōt	fēt (古くは fōti)
属格	fōtes	fōta

2 松本克己「イオニア・アッティカ方言の母音体系について―通時音韻論的考察―」金沢大学法文学部論集 十四, 1966.

与格

fēt (古くは fōti)

fōtum

(pp.325~326, 長音記号を加筆)

この変化の中で、単数形対複数形の対比という点でいうと、単数形の語幹母音 \bar{o} 対複数形の語幹母音 \bar{e} という交替はおおむね規則的であった。ただし、単数形の語幹母音 \bar{o} 対複数の語幹母音 \bar{e} の交替を完璧なものとし、例外のない「均整の取れた体系」、「言語の経済性」を志向する形態の体系としては、ウムラウトによって生じた単数与格 fēt は不都合であった。その結果、単数与格の fēt は廃用になり、fōte が採用されて、単数形はすべて規則的に \bar{o} を持つようになった。

ところが、今度は複数形の体系内で、例外的に語幹母音に \bar{o} を持つ属格 fōta と与格の fōtum に違和感が持たれるようになった。そこで、使用頻度の高い主格・対格の fēt との類推で、属格と与格の fōta, fōtum は \bar{e} を持つ他の格に合わせて規則的に fēt 形になった。その結果が単数形はすべて規則的に \bar{o} をもち、複数形はすべて規則的に \bar{e} をもつ中期英語の体系である。

(10) 中期英語の単数・複数体系

	単数	複数
主格・対格	fōt	fēt
属格	fōtes	fēte
与格	fōte	fēten

(p.327, 原文にあるアスタリスクは除いた)

以上に見られる単数形 fōt と複数形 fēt の一連の形態変化は、ウムラウトという音声変化に端を発して、類推的作用により形態上の整合性を復活して、形態としての十全の機能を発揮する過程と結果のあらましを叙述したが、音声変化として発生し、結果として印欧祖語の文法上重要な形態の交替であるアプラウトの発生とその結果とまったく同じ経過をたどっている。いずれも音声のパターンと形態のパターンが、類推を媒介として密接に相互作用して不規則を生じた体系が規則的な体系に修復されている様子を顕著に表している。

§3 「類推」を駆流 C に加える

すべての単数形が語幹母音に \bar{o} を持ち、すべての複数形が語幹母音に \bar{e} を持つという整然とした形態の体系が回復された。英語史上に生じた単数形 foot と複数形 feet の形態のこの連鎖的推移は、たとえ音声の機械的な変化によって破壊されても、形態の体系には自らの力で理想的なパターンを回復する、もしくは修復する能力があることを明瞭に示している。従来の研究では、音声変化が勝手に機械的に変化し、形態はその影響を受容するだけという考え方であった。そして、類推は破壊された部分を補てんするだけという補助的な役割しか与えられていなかったがサピアによって、類推は、従来の補助的な役割から言語変化における普遍的な、かつ建設的な役割を与えられた。

単数形 foot と複数形 feet の形態変化に関するサビアの解釈にみられる重要な点は以下のよう
に要約できる。

第一に、

(11) 個別言語の音声パターンは、一定不変ではないが、パターンを構成している個々の音声
要素ほどたやすくは、変化しない。パターンに含まれるすべての音声要素は、全面的
に変化する場合があるが、それでも音声パターン自体は影響を受けないままである。
(p.324)

(12) 音声のパターンと、パターンを構成する個々の音との関係は、形態のパターンと、その【パ
ターンを構成する】具体的な形態的要素との間に存在する関係に平行している。音声
のパターンと形態のパターンはともに頑固に保守的である。どちらの方が保守的なのか
はわからない。両者は、現時点では十分には理解できないあり方でたがいに関連し
あっているのではないか。(p.325)

従って、音声のパターンに見られるような変化は形態のパターンにも見られる。すなわち、音声
のパターンと個々の音声要素との関係を述べた引用(11)は、「音声」を「形態」に置き換えれ
ば以下の(13)のようにそのまま形態のパターンにも当てはまる。

(13) 個別言語の形態パターンは、一定不変ではないが、形態のパターンを構成している個々
の形態要素ほどたやすくは、変化しない。形態のパターンに含まれるすべての形態要
素は、全面的に変化する場合があるが、それでも形態のパターン自体は影響を受けな
いままである。

第二に、形態も音声と同じくパターンを堅持し、音声変化の影響で体系に不都合が生じた場合
は類推の作用により自主的にもとの整合性のある体系に回復する力がある。次の引用(14)で
は、形態を優先した書き方がなされている。形態のパターンにおいても音声のパターンと同じ性質
がみられるとしてサビアはいう。

(14) このような駆流の平行は、形態の領域はもちろん、音声の領域でも作用することが
あるし、同時に両者に影響することもある。(p.298)

その際、類推が積極的、かつ建設的に参入する。

(15) このように、類推は、音声変化の結果として生じた不規則変化形を規則的に修復す
るばかりでなく、確立されて久しい形態の体系に【一層の整合性を求めて】新しい
変化を持ちこみ、この体系をさらに簡素化し、規則的にする作用がある。こういう
類推による調整はほとんど常に言語の一般的な形態の駆流の兆候となる。(p.329)

類推にこのような建設的な役割を認めたのは筆者の知る限りサビアだけである【ただし、ソシュール, pp.225f】。

第三に、英語の foot : feet, mouse: mice, ドイツ語の Fuss: Füße, Maus: Mause の単数形 : 複数形の形態上の変化を、英語とドイツ語に共通に生じたウムラウトの並行現象として説明しながら実は英語とドイツ語における「大母音推移」は英語とドイツ語がゲルマン祖語の時代から受け継いできた「駆流 (drift)」の作用であることを証明している。が、同時に、そしてもっと重要なことは、このような母音の大推移を経過しても（あるいはグリムの法則のような大規模な音声推移を経過しても）、結果として現在行われている音声体系は、たとえ体系を構成する要素がすべて入れ替わっても、祖語から受け継がれた体系の枠（パタン）そのものには何らの変更も受けていないことである。

いろいろな言語にみられる変化の現象も広い視野で長い歴史をよく観察すると、根幹をなすパタンは変化していない場合が多くある。言語のパタンは変化に激しく抵抗する性質をもつ、として古代サンスクリット語と現代英語の語頭子音の体系が例として挙げられている。

(16) 英語の語頭子音の系列

p t k
b d g
f th h

は、次のサンスクリット語の系列にひとつひとつ対応していることに注意すれば、深い感銘を受ける。

b d g
bh dh gh
p t k
(pp.324-325)

確かに、印欧諸言語の中でも子音体系をよく保存しているサンスクリット語の語頭音の体系は、現代英語の語頭音の体系とそっくり同じである。まさしく「パタン【体系】を構成する要素が変化してもパタンそのものは頑強に変化に抵抗する」というサビアの主張を目の当たりにすることができるのである。

従来の比較言語学であれば、音声の変化をまず最優先に述べて、次に、音声とは切り離して形態について論じるという順序に従う。比較言語学の研究は大部なものが多いが、見方によっては、言語研究の方法そのものは単純であって、グリムの法則、ヴェルナーの法則など音韻変化の規則性を強調することに重点を置いているので理解するのはそれほど難しくない。また、音韻法則の例外は、無条件に、借用あるいは、類推として安易に片付けられている。研究書が大部なのは、なるべく多くの言語からできるだけ多くの証拠を集積しようとするためである。

ところが、サビアは形態と類推にも音声に劣らず重要な地位を与えて関連させて述べている。そして、形態のパタンという織物生地に、音韻、形態、類推、借用が複雑な模様をなして、時には重ね合わせて織り込まれているので、用いられている用語・概念が単純なわりには奥行きが深く、視野の広い内容になっている。それこそがサビアの *Language* が読むたびに教えられる深い内容を持っている理由である。

サビアは音声のパタンと形態のパタンに類推作用を加味して言語の変化における普遍的な要因と考えている。そこで音声のパタンの重要性を述べた引用(11)と形態のパタンの重要性を述べた引用(12)、(13)に「類推の作用」を加えて次のように書き換えてみることができる。

- (17) 個別言語の音声パタンと形態のパタンは、一定不変ではないが、これらふたつのパタンを構成している個々の音声要素、個々の形態要素ほどたやすくは変化しない。パタンに含まれるすべての音声要素、形態要素は、全面的に変化する場合があるが、それでも両パタン自体は、類推の修復作用、保存作用が働くので、結果的になんらの影響も受けないままである。

§4 ウムラウト(音声論)からアブラウト(形態論)へ: 駆流 C

サビアによれば、footの形態変化に見られるゲルマン語のウムラウト(Umlaut, i-mutation)という現象はゲルマン語だけに特有の現象とはいえない。なぜなら印欧祖語が母音の交替(アブラウト=Ablaut)という形態的手段を文法組織に活用し、その経験を受け継いで初めて、同じく母音の交替を文法手段として活用するウムラウトが実現可能になったからである。その意味では印欧語族に属するすべての言語にはウムラウトを持ちうる条件が整っているのである。

音声の変化であるウムラウトと、形態の変化であり、従って文法的機能であるアブラウトとが別個の現象ではなく表裏一体の関係をなしていることが以下のように述べられている。

- (18) ゲルマン諸語に属するすべての言語は、母音交替【アブラウト】が機能的な意義を有することをよく承知していた。sing, sang, sung, songに見られる母音交替は、【印欧祖語の時代から存在していたので】言語意識に深く染みこんでいた。(…)さらに、【アブラウトという印欧諸語にとって】象徴的な交替(sing, sang, sung, song)の存在も、性質の類似した新しい形態の交替【つまりウムラウト】の台頭を誘引する力として作用したのだった。(pp.322-3)

サビアからの引用(18)の意味を考えてみる。

サビアは英語のfoot-feet、ドイツ語のFuss[fu:s]:Füsse[fü:zə]という単数形:複数形の成立に関して、西ゲルマン語以降に生じたウムラウトという現象を論じ、音声のパタン、形態のパタン、類推、アブラウトというキーワードと概念を駆使して印欧祖語から現代英語に至る印欧諸語の長い歴史全体を鳥瞰して、音声面、形態面、あるいは駆流、類推という視点から多面的に解明しその全体像を明らかにした。

ところで、不思議なことに印欧比較言語学者とゲルマン比較言語学者は、アプラウトはきわめて重要な現象として大きく扱うが、ウムラウトについては印欧比較言語学者は扱わず、西ゲルマン語以降の時代に属するのでゲルマン比較言語学者は守備範囲外としてほとんど言及していない。また、英語史では印欧諸語、ゲルマン諸語の歴史についてはほとんど触れられていない。つまり、印欧比較言語学、ゲルマン比較言語学、現代の各言語の歴史のそれぞれが切り離され個々別々に研究されていて実質的にはたがいに交流も接触もほとんどしていない。アプラウトは本来音声現象であるのに印欧・ゲルマン比較言語学では主に形態の問題として扱われているがそれ以降の言語学では論じられることはない。ウムラウトに至っては、西ゲルマン祖語と古期英語との間にあるためか、筆者の知る限り、本格的に言及する研究が見当たらない。結局、アプラウトもウムラウトも印欧諸語から現代の言語まで通した研究が見当たらない。

ところが、印欧祖語の時代に属するアプラウトのその後をたどってみると、興味深いことに、ウムラウトと同じ変化の過程を経ていることがわかる。19世紀以来の印欧比較言語学では「印欧祖語の時代には、アプラウトの体系は音声変化と形態変化が完了してそれなりに確立し、安定していた」という前提で、母音交替すなわち形態の機能とみなされ、それがそのまま継続して用いられたとされている。ところが、例えば、アプラウトがひとつの典型的な形で残されている現代英語の強変化動詞（不規則変化動詞）の歴史をみると、サピアが英語とドイツ語のウムラウトの歴史で鮮やかに分析してみせたのと同じ経緯をたどっている。すなわち、

(19)

- 1) まず最初に発音上の都合で意味・形態に関係なく音声の変化が生じる。
- 2) 次に、音声の変化により形態の体系に不規則を生じ、言語運用上不都合を生じる。
- 3) そして最後は類推が作用して音声変化によってもたらされた不規則形が修復され規則的な形態の体系が復活する。

という経緯がはっきりと認められるのである。そして改めて次の音声の変化が始まるのである。すなわち、アプラウトもウムラウトもこの3つの段階が三位一体となり円環運動を繰り返しているのである。サピアのいう通り、音声のパタンと形態のパタンと類推は三位一体をなして言語変化を繰り返しているのである。

(20) 言語史における音声変化、形態変化、類推作用の循環

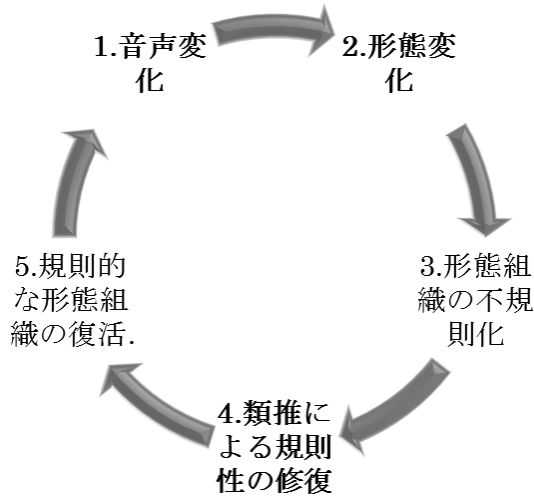
音声変化⇒形態変化⇒形態組織の不規則化⇒類推作用⇒規則的な形態組織の復活を
図式であらわすと次頁のようになる。

単純化していえば、印欧祖語の場合、アプラウトは「5. 規則的な形態組織の復活」の段階から始まり、ゲルマン語のウムラウトは「1. 音声変化」の段階から始まるが円環運動そのものはいつの時代にも作用する。

印欧祖語以降のアプラウトの歴史をたどってみる。

印欧祖語から継承されたアプラウトには、「重複 (reduplication)」による第7系列を除くと

以下の6系列がある。



(21) 印欧祖語のアプラウト体系 (現代英語の例)

- | | | | | |
|----|----|----|-----|---|
| 1. | ī | ai | i | i (drive - drove - (drove) - driven) |
| 2. | eu | au | u | u (choose - chose - (chose) - chosen) |
| 3. | en | an | un | un (drink - drank - (drank) - drunk) |
| 4. | er | ar | æ:r | or (bear - bare, bore - (bere, bore) - born(e)) |
| 5. | e | a | æ: | e (eat - ate - (ate) - eaten) |
| 6. | a | ō | ō | a (shake - shook - (shook) - shaken) |

そのうちの第2系列が現代英語に残る choose の活用を例に取ってみる。

(22) 印欧語の母音交替

印欧語:	*geus-	*gau-	*gu-	*gu-
ゲルマン祖語:	keusan	k <u>a</u> us	ku <u>s</u> um	ku <u>s</u> anoz
古英語期:	c <u>e</u> osan	c <u>e</u> as	cu <u>r</u> on	co <u>r</u> en
中期英語:	che <u>e</u> sen	che <u>e</u> s		cho <u>s</u> en
現代英語:	cho <u>o</u> se	cho <u>s</u> e		cho <u>s</u> en

(中期英語以降, 過去複数形は消失)

5千年にわたる印欧祖語の * geus- から現代英語の choose までの長い歴史の間の幾多の変遷を通じてアプラウトという音声・形態のパターンは、パターンを構成する要素は全面的に変化してもパターンそのものは変わることなく堅持されてきた。例えば, rhotacism (r音化: 例。(s>z>r: kusanoz> [-z-] > coren-) という機械的な音声変化により不規則となった形態の体系を類推作用により規則化したこと(過去分詞の coren → chosen), 屈折形全体の幹母音を -o- に統一したこ

と (cheesen>choose; 語頭子音を k [-k-] を ch-[ç] に統一: coren [-k-] > chosen[-ç-])。その結果、類推作用により規則的な形態のパターンが回復されたことがはっきりと認められる。まさしくサピアの言語史の原理がいかに作用している姿にほかならない。

現代英語の不規則変化動詞(強変化動詞)の活用にみられる母音交替は印欧祖語から連綿として受け継がれてきたアプラウトの名残りである。しかし、印欧祖語の時代から6系列(重複形を含めれば7系列)の母音交替のパターンそのものはいささかも損なわれることなく現代英語まで受け継がれてきた。そのうちの一例である choose-chose-chosen だけを取り上げた。合計6系列の不規則変化形は古期英語では総数約312を数えたが現代英語までには使用頻度の高い約66語にまで減少した³。しかし、現存する66例の不規則変化動詞もすべて、choose にみられたアプラウト→音声変化→形態上の不整合→類推による整合性のある形態の回復→音声変化という円環運動を繰り返してきた。その様子は言語変化の三位一体の変化の典型的な姿を見るようであり、言語の歴史の全体像のジオラマを見るようである。しかも、現存する66例の不規則変化動詞はいずれも英語本来語であり、使用頻度も高く今後ともに消失する可能性は低い。例: strike, bite, drive, ride, rise, write, shine, freeze, begin, spin, bind, song, swing, find, sing, swim, win, wind, bear, break, steal, tear, come, bid, break, steal, eat, give, get, lie, see, sit, speak, draw, shake, stand, swear, fall, grow, know, throw, etc. (wear, ring は類推により弱変化から)。

印欧比較言語学では、アプラウトを形態・文法としての機能に触れているだけだが、サピアはウムラウトもアプラウトもともに、起源は音声現象だが結果としては、印欧語の重要な文法・形態機能を果たしていることを述べて音声と形態の表裏一体の相互作用を強調している。サピアがウムラウトにより、機械的な音声変化→形態系の不規則→類推による形態組織の修復→規則的な形態組織の復活という経過で証明したことはアプラウトにも見出される。アプラウトもウムラウトと同様に、音声変化→形態系の不規則→類推による修復→規則的な形態系の復活という全く同じ手順を繰り返している。この手順は印欧語に限らずこの言語でも、いつの時代にも繰り返されていると考えられる。

従って、もとはといえば音声の現象であるアプラウトを文法機能に活用することがすでに十分に言語意識に根付いていた印欧語族に属するどの言語にもアプラウトに類する現象であるウムラウトが生じて不思議ではない。ウムラウトというとゲルマン諸語のみに特有の現象であると考えられているが、印欧語族に属するどの言語がウムラウトを生じて不思議ではない。印欧諸語のうち、ゲルマン諸語だけが後続母音の影響に敏感に反応してウムラウトを生じたのか、あるいは基層言語(substratum)の影響が引き金になったのかはわからないがサピアのいう言語が祖語から受け継いだ「母音の交替を文法機能に活用する」というパターンあるいは「駆流」はそれほど根強い性質をもっているのである。その際、音声のパターンと形態のパターンと類推は三位一体となって作用する、というサピアのことばどおりである。印欧語族に限らず、世界中の多くの言語の何千年、何万年にわたる推移を広い射程で注意深く見通すことのできたサピアにして初めて断言できる主張である。

3 分類と例数は C. C. Fries, *American English Grammar*, 1940, rpt.1964, Maruzen, p.61による。

- (23) 言語【話し言葉、以下同じ】は計り知れないほど太古の昔から人類の遺産である、と信じないではおられない。人間の文化遺産のうちで、火を得るために錐(キリ)をもむ技術にせよ、石を削る技術にせよ、話し言葉以外にもっと古くからあった、と主張できるものがあるかどうか、疑わしい。私としては、話し言葉は、最も低級の物質文化の発達よりもずっと以前に生じており、しかも、重要な表現の道具である言語が、それ自体はっきりとした形をとるまでは、言語以外の文化の発達は、厳密には不可能であった、と信じたい気持である。(p.44)

例えば、印欧祖語の再建形 *pāter, *māter という語が話し言葉として人々の間で「父親」「母親」を意味するという合意が、無意識のうちにしる意識的にしる、確立されるまでに一体どれだけ長い年月を要したのかということに思いを致してみれば、サビアのいうこともごく当然のことである。気の遠くなるような長い言語の歴史からみれば文字の発明は言語の歴史にとってはごく最近のできごとである。サビアが *Language* の副題を *An Introduction to the Study of Speech* とした真意はこの意味であった。世界中に3000とも6000ともいわれる言語のうちで文字を持つ言語は約400にすぎない。また、他のすべての原始人類が絶滅して、現生人類(ホモ・サピエンス)だけが現代まで生き延びて繁栄し、故地(ハイマツ)であるアフリカを6万年前に出立してから以後驚異的な加速度で地球上に拡散していった事実は言語の裏付けと発達なくしては考えられない。

§5 駆流C: 音声のパタン、形態のパタン、類推

最後に、人類の言語すべてに共通の普遍的な駆流(駆流C)とは、以下の3点であるがいずれも大きなテーマであり、本稿はそのほんの一端を垣間見たにすぎない。駆流Cは海流のさらに深海を地球規模で流れる長大な海洋深層水にたとえることができるであろう。

(24)

1. ひとつの方向に向かう一般的な駆流。その性質についてはほとんど何も分かっていないが、主として力動的な性格(たとえば、強勢の大小、要素の有声音化の大小に向かう傾向)を持っているのではないかと考えられる。
2. 再調整的な傾向。当の言語の根本的な音声パタンを保存または回復することを目指している。【音声のパタンと類推】
3. 保存的な傾向。これは、あまりにも深刻な形態上の動揺が主要な駆流にとって引き起こされる恐れのあるときに始まる。【形態のパタンと類推】(p.323-4)

[補注]

サビアからの引用文の訳は、本稿の主旨に沿って三輪が訳した。ただし、参照の便宜を配慮して岩波文庫版の頁数を付記した。【 】は三輪の補足説明。

参考文献

- Bradley, H. (1904, 1968²) *The Making of English*. Macmillan: London.
寺澤芳雄訳 (1982) 『英語発達小史』 岩波書店。
- Bloomfield, L. (1933) *Language*. New York : Holt.
三宅鴻・日野資純訳注 (1962, 1969) 『言語』 大修館書店。
- Fries, C.C. (1940, rpt.1964) *American English Grammar*. 丸善。
- Hockett, C. F. (1987) *A Leonard Bloomfield Anthology*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Koerner, K. (ed. 1984) *Edward Sapir: Appraisals of his Life and Work*. Amsterdam: John Benjamins.
- 高津春繁 (1954) 『印欧語比較文法』 岩波書店。
——— (1942, 1950²) 『比較言語学』 岩波書店。
- Murray, J.A.H., et al (1884-1928, 1982², CD-ROM Version 4.0, 2009) *Oxford English Dictionary*. OUP.
- Sapir, E. (1921, 1963) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt & Brace.
安藤貞雄訳 (1999) 『言語』 岩波書店。
泉井久之助訳 (1957) 『言語』 紀伊国屋書店。
木坂千秋訳 (1943) 『言語』 刀江書院。
長嶋善郎注釈, *Selected Writings of Edward Sapir*. (1981) 南雲堂。
———, (1925) “Sound Patterns in Language” *Language* 1.
木坂千秋・郡司利男訳 (1957) 『英語音韻論』 研究社英語学ライブラリー10。
黒川新一訳注 (1958) 『音声構造の型』 英語教育シリーズ11, 大修館書店。
パウル, H. (1880, 1920⁵) 『言語史原理』 福本喜之助訳 (1965, 1976) 講談社。
林哲郎 (1990) 『英語学史研究への道』 開文社。
松本克己 (1966) 「イオニア・アッティカ方言の母音体系について」 『金沢大学法文学部論集』 14。
三輪伸春 (1988) 『英語史への試み—附：言語過程説論争—』 こびあん書房。
『月刊言語』 (特集サピアの言語論) (1979) vol.8 No.2. 大修館書店。

原稿受領日：平成25年10月2日；Received 2 October 2013

掲載受理日：平成25年11月12日；Accepted 12 November 2013